

哲学

◇教員◇

教授：鈴木泉、納富信留、古荘真敬

准教授：乗立雄輝

助教：相松慎也

◇学生◇

学部：51名、修士課程：15名、博士課程：15名

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の三学科中「哲学科」に属する「哲学」専修学科として今日にいたる基礎を固めた。草創期には井上哲次郎、ケーベルなどの教授陣を擁し、西田幾多郎、田辺元、九鬼周造らを輩出した。戦後も多くの哲学者、研究者を産み出し、今日に至るまで我が国の哲学・思想研究の世界に大きな一角を占め続けている。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年から2015年までは、思想文化学科中の、さらに現在では人文学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一翼を担っている。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科のなかの哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的研究および哲学の体系的なおこなっている。2023年4月現在、教授3名・准教授1名・助教1名の陣容であり、哲学の幅広い領域をカバーするスタッフ構成となっている。なお、毎年4～5名の非常勤講師をも迎え、一方では長い歴史をもつ西洋哲学史の全体にわたり、また他方では哲学の諸分野にほぼ均等な比重をもたせた形で、授業を行っている。また、外国人研究者がしばしば訪れて、特別講義や講演会、セミナーなどが開催され、海外の今日的な研究にじかに触れる機会も豊富に持つことができる。さらに、哲学研究室の教育・研究活動は、死生学・応用倫理センターの授業や研究活動と連携しており、それらを通じて先端的な文脈での実践哲学を学ぶこともできるようになっている。

哲学専修課程のカリキュラムは、講義と演習に大別され、講義は、哲学概論、西洋哲学史概説第1部、同第2部、哲学特殊講義からなっている。

哲学概論は、西洋哲学史上繰り返し論じられてきた重要テーマを取り上げつつ、哲学的営為の実際を展開してみせる。

西洋哲学史概説第1部は、古代中世哲学史の概説であり、同第2部は、近現代哲学史の概説であるが、本専修課程では、古代から現代までの概説的な哲学史の知識は、学生諸君が各人でしかるべき書物等をとおして、自発的に我がものとすることを期待している。したがって、実際の講義は多くの場合、そうした概説書では読むことのできない、最新の専門的な見解に基づく生き生きとした哲学の通時的営みが、論じられる。

哲学特殊講義は、各担当教員が、自らの目下の研究テーマをめぐって、自らの哲学的営為の現場を繙いて見せるものである。

哲学演習は、古代から現代にいたる哲学史上の代表的諸著作を、原典で講読する。

次に、各教員の紹介をしよう。

鈴木教授は、西欧近世哲学ならびに現代フランス哲学を研究のフィールドとしている。様々な意匠をとって現れる根拠への拘束から離脱し、存在の多様な声に開かれた〈内在性の哲学〉を独自に体系化する作業を進めつつある。具体的には、(1)ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての哲学史を素材とする、超越なき〈内在性の哲学〉を可能にする〈存在の一義性〉の系譜学の跡付け、そのモデルケースとしての「スピノザ/ライプニッツ問題」の解明、(2)現代における〈内在性の哲学〉の範型としてのドゥルーズ哲学の解凍とその展開、(3)〈内在性の哲学〉を開かれた場において提示することを目指して、分析的形而上学の議論や日本（語）の哲学との突き合わせ、を進めている。また、以上とは別に、日本最古の哲学系の学会である「哲学会」とその学会誌『哲学雑誌』を素材とした近代日本哲学の形成に関する共同研究を進めている。編者の一人を務める『スピノザ全集』（岩波書店、全六巻＋別巻）の刊行が始まったばかりである。演習では、デカルト・スピノザ・ライプニッツなどの古典的テキストの精読を通して哲学のテキストを読解する技法を教授すること、をそれぞれ目指している。

納富教授は、西洋古代哲学が専門で、古代ギリシア世界における「哲学

（フィロソフィア）の誕生」をテーマとしている。具体的には、前 6 世紀初めから前 5 世紀の初期ギリシア哲学、前 5 世紀後半のソフィスト思潮とソクラテス、及び、前 4 世紀のプラトン、アリストテレスらの古典期哲学を中心に研究している。また、日本における西洋哲学の受容も近年のテーマである。近年は哲学諸領域を統合する「世界哲学」のプロジェクトに関わり、『世界哲学史』（ちくま新書、全 8 巻＋別巻）の共同編集を行った。演習では、古典ギリシア語のテキストを読み解きながら、ダイナミックな知的潮流のなかで「哲学」という営みが成立する様を明らかにする。国際プラトン学会（元会長）、国際哲学学会連合（実行委員）など海外での研究活動が多い。著書に *The Unity of Plato's Sophist* (Cambridge University Press)、『ギリシア哲学史』（筑摩書房）、『哲学の誕生』（ちくま学芸文庫）、『ソフィストとは誰か？』（ちくま学芸文庫）、『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会）、『プラトンとの哲学 一対話篇をよむ』（岩波新書）など、翻訳に、プラトン『ソクラテスの弁明』『パイドン』（光文社古典新訳文庫）などがある。

古荘教授は、ハイデガー哲学の研究から出発して、19 世紀半ばから 20 世紀の欧米および日本において展開された生の哲学、実存哲学、現象学とその周辺テキストの解釈を試みながら、人間の実存の本質構造に関する現象学的探究を行っている。具体的には、言語、感情と理解、行為、時間意識、共同存在、芸術、宗教といった諸現象をめぐるカント以後の哲学者たちの思索において、いかにいわゆる超越論哲学と生の哲学という二つの思考形式が必然的に絡み合いながら展開されているかを解きほぐしながら、人間の生命と言葉との連関の意味を明らかにすることが試みられている。そうした歩みを通じて、いまいちど「生の意味」を問い直す現象学的実存論を提起することが目標である。演習においては、主としてドイツ語で書かれた近現代哲学のテキストを精読しながら、古典的テキストの精緻な読解と学生各自の哲学的探究を両立させる授業を模索している。

乗立准教授は、英語圏の哲学、特に 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてアメリカ合衆国で展開されたプラグマティズムと形而上学を中心とする思潮を専門としている。主として取り組む哲学者はパース、ジェームズ、ホワイトヘッドであるが、彼らの経験主義的な形而上学の理解と探究に努め、そこに立脚しながら、それらの哲学史的意義の考察、現代の形而上学との接続、さらに、哲学的宇宙論の可能性を拓くことを試みている。また、

パースの共同体論を出発点として、知識と社会との関係を問うことも課題としている。講義においては、経験論を中心とした近現代哲学がはらむ諸問題と可能性を考察する。演習においては、パース、ジェイムズ、ホワイトヘッドらの営為が、中世後期から近世・近代の哲学的伝統をいかに批判的に継承しているのか、また、それらが現代の哲学者たちの思考とどのような関係を結びうるのかを考察していく。

文学部を卒業するために必要な単位は76単位だが、哲学専修課程では、そのうちの44単位を必修科目としている。さきに挙げた、哲学概論、西洋哲学史概説第1部、同第2部の各4単位と、哲学特殊講義から12単位、哲学演習から8単位、それに卒業論文12単位である。哲学演習は、必修8単位のうち最低限3セメスターにわたって2単位ずつ以上とるように定めているが、それはここにおいて、欠かすことのできない先哲との対話がテキストをとおして行われるからである。

こうした哲学演習に積極的に参加しうるために、英語、ドイツ語、フランス語、それに、ギリシア語、ラテン語を学習していることが望まれる。また本専修課程進学志望者は、さらに前期課程において基礎科目の「哲学」「倫理」、総合科目「現代哲学」「記号論理学」の諸講義を受講しておくことが望ましい。

なお、必修科目のうち、卒業論文は、自らが哲学を学ぶことにおいて、徹底的に遂行した思索の証となるものとして、とりわけ重要なものである。その内容は、西洋哲学の歴史的研究、体系的研究のいずれに関するものでもよく、まず学生が自分で論題を設定し、次に教員の承認を得て、論文を作成する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して100枚以内(40,000字以内)である。毎年、卒業年度の7月はじめの頃に卒論ガイダンスの機会を設け、教員が適切な助言・指導等を行っている。

修了後の進路：哲学専門分野、他領域、他研究科を含めた大学院への進学、新しい分野への学士入学など、学業を続ける学生と、就職する卒業生に分かれ、後者が幾分、多い。哲学専修課程の卒業生の就職状況は(大方の予想に大いに反して)大変良好である。就職先は、報道、出版、広告、商社、銀行、メーカー、官公庁などの他に、最近ではシステム・エンジニアなど、コンピューター関連会社も多い。